

# 南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム

## ——言語理論と日本語教育、そして日本語教師養成をめぐる——

武内 道子

南山大学は外国人留学生別科において、外国人留学生に対する日本語教育を行ってきたが、今年（わが言語センターと同様）設立20周年を迎えた。さらに、平成4年に日本語教育専門家養成をめざして、外国語学研究科に日本語教育専攻の修士課程を開設し、初めての修了生を輩出したという。別科と日本語教育専攻が共同で、20周年と修士過程の軌道に乗ったことを記念して、この国際シンポジウムが平成6年6月18日と19日の両日開催された。

内外ともに著名な言語学者と教育者を日米から迎え、参加者は当初250名を予定していたが、あまりの申込者の多いのに倍近い人数を受け付けたようである。それでもかなりの人を断わらざるを得なかった由である。

第一日（18日）の午前のセッションは三つの基調講演があった。井上和子氏による「日本語教育における言語学の役割」は、過去の日英対照研究によって明かすみにされた二言語間の普遍的特性と個々のあらかれの差異が、効果的に、効率的に日本語教育に寄与してきたことを述べ、今後の研究は個々の文法事象間の比較対照だけでなく、言語全体の組織的差異、有機的つながりを見ていくことの必要を強調された。

「アメリカで日本語を教えるために」と題された三浦昭氏（現ウイスコンシン大学教授）の話は、氏の40年余に及ぶアメリカでの教師業の実際であった。終戦直後のarmy methodから始まって、戸惑い、驚き、挫折、喜びを具体的な出来事を交えて話され、笑いと感銘を誘った。宮地宏氏（ミドルベリー大学教授）は“Language, Culture and Personal Identity”と題し、言語教育に携わる者はいかにあるべきかという哲学的考察を自身の経験から話された。

第一日の午後から分科会になり、日本語教育研究発表が6本、日本語学関係の研究発表が10本あつ

た。さらに、日本語教育関係のパネルディスカッションが3回もたれた。それぞれのタイトルは「留学生の交流と日本語教育」、「言語教育の諸理論の評価と日本語教育への展望」および「教師養成における諸問題」で、いずれも教育にまつわる大きな問題を、4人のパネリストと司会によって白熱した議論が飛びかった。研究発表者もパネリストも、アメリカ人、イギリス人、中国人が加わっていたが、すべて日本語で行われたのが印象に残った。

私は日本語学分科会にのみ顔を出した。アメリカから第一線の日本人、アメリカ人の文法学者、理論言語学者が顔を揃え（久野暉、黒田成幸、宮川繁、斎藤衛、Naomi McGloin, C. Fillmore）、国内の若手学者も加わった発表は、一つ一つが密度の濃いもので、頭も身も消耗した。

日本語教育者はph.Dを持ち、言語学者は教えることを経験しており、こういう背景が一方通行、独断的にさせない雰囲気を作っているように見受けられた。理論と実践の場の行き来の必要性はどの分野でも必須であろう。言語の理論的研究と日本語教育（裏返しとしての英語教育）の相互活性化にこのシンポジウムは貢献すること大であると確信した。個人のレベルでも、国内的にもそして国際的にも意義あるものであった。

国際キリスト教大学の語学科が戦後育成してきた日本語教師がアメリカ各地に散らばって、地についた立派な仕事をしてきたことが改めて認識された機会でもあった。さながらICUの同窓会の感があり、私事のレベルでも、懐かしい人々とのたくさんのお会いがあり、旧友を暖める機会になり、有益であった。懇親会、昼食時、ティータイムも議論とreunionに花が咲き、盛会そのものであった。